

審査論文要旨（日本文）

論文提出者氏名： 大野 浩太郎

審査論文

題名：Associations among depressive symptoms, childhood abuse, neuroticism, and adult stressful life events in the general adult population

（一般成人におけるうつ症状に対する幼少期虐待、神経症的特質、成人期のライフイベントの関連）

著者：Kotaro Ono, Yoshikazu Takaesu, Yukiei Nakai, Akiyoshi Shimura, Yasuyuki Ono, Akiko Murakoshi, Yasunori Matsumoto, Hajime Tanabe, Ichiro Kusumi, Takeshi Inoue

掲載誌：Neuropsychiatric Disease and Treatment (in press, 2016)

（審査論文要旨：日本語論文の場合 1,000 字以内・英語論文の場合 500 words）

【目的】

近年、虐待を含めた幼少期ストレスと成人期のうつ症状の強い関連が報告されている。幼少期ストレスと成人期のうつ症状の間には長い時間的間隔があり、それらの間に様々な媒介要因が存在することが想定される。しかしそれらの媒介要因はまだ十分には解明されていない。今回我々は幼少期ストレス、神経症的特質及びライフイベントの否定的評価が相互に関連して成人期のうつ症状に影響を与えること、また幼少期ストレスの成人期のうつ症状及びライフイベントの否定的評価に対する2つの効果において、神経症的特質が媒介要因であるという仮説を立てた。

【方法】

2014年1月から2014年8月の期間において、853人の一般成人ボランティアに対し自記式の質問紙による調査を行い、そのうち有効回答が得られた413人(48.4%)を対象とした。下記4つの質問紙：Patient health questionnaire-9(PHQ-9)、short-scale Eysenck Personality Questionnaire-Revised(EPQ-R)、Child abuse and trauma scale(CATS)、Life experiences survey(LES)を使用し、それらのスコアの関連について構造方程式モデリングを用いて解析した。本研究ではデータを匿名化することにより、参加者のプライバシーへ配慮した。

【結果】

幼少期の被虐待体験、神経症的特質及びライフイベントの否定的評価はそれぞれ直接的にうつ症状を悪化させた。幼少期の被虐待体験は直接的にうつ症状を悪化させると同時に、神経症的特質を媒介要因として間接的にもうつ症状を悪化させた。また神経症的特質はライフイベントの否定的評価を増強し、この経路を介して間接的にもうつ症状を悪化させた。

【結語】

幼少期ストレスの成人期のうつ症状及びライフイベントの否定的評価に対する2つの効果において、神経症的特質が重要な媒介要因である可能性を指摘した。これらの媒介効果を検討した研究はこれまでになく、本研究が抑うつの感情発生解明に寄与することが期待される。

(798 文字)